

NPO法人 光と風 と 復興観光まちづくり活動

NPO法人 光と風 副理事長 千葉科学大学教授 **船倉 武夫**

1. 出会い

本NPOの理事長・渡邊義美と筆者が知り合ったのは、2011年初夏、旭市飯岡灯台と並んである刑部岬展望館1階の多目的室であった。もともと渡邊は、刑部岬の上に建つ民宿レストラン海辺里のオーナーで、千葉科学大学卒業生の保護者として縁があっても面識はなかった。

約束の時間より早く着いたので、展望館3階デッキに立った。眼下に広がる太平洋は午後の陽にきらめく。目を陸に転じると、飯岡バイパス(国道126号)の人工的な白い筋が見え、緑の台地が広がる。海風を受けて風力発電が回っている。旅の思い出に切り取るためであろう旅行客が盛んにカメラを向けている。1階の多目的室へ降りて行った。ガラス越しにすでに集まっている人々が見えた。引き戸を開けると、湿った空気の高さを感じた。

2. 光と風キャンペーン実行委員会

展望館のテーマは「光と風」とある。ここを拠点とする観光情報の発信を目的とした市民ボランティアの集まりに招かれたのである。

会議は、飯岡宿泊組合長でもある渡邊へある旅行者からの電話の話から始まった。「東日本大震災の津波被災地を見学したいという客からの需要がある。しかし東北へ行くには時間も費用もかかる。忘れさられた被災地・飯岡というニュース

千葉県旭市
いいおかぎょうぶみさきてんぼうかん
飯岡開港部岬展望館 **光と風**

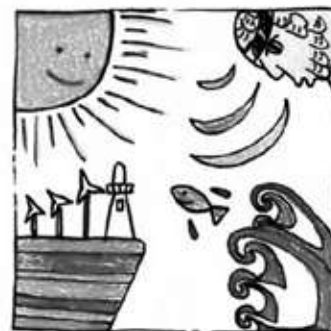


旧飯岡町公共下水

をテレビでたまたま見た。親子防災教室を企画している。検討してほしい」。

宿泊組合長という立場もあるけれども、どうしたら人声が消えたまちに観光客を呼び戻し活力を与えられるかと、渡邊は考えていたところであった。受け身で待っているは駄目だ。被災者も互いに力を合わせ、復興に向けて何か行動をしなくてはならない。「ぜひお引き受けしたい。具体的な内容は今後ご相談させてほしい」と、電話を切ったという。

知人を通じて、防災教育に関心があり、ボランティアで協力してくれる人を探し、紹介を受けたと、筆者へ話が振られた。



3. 稲むらの火

前年の初秋、千葉県教育委員会による「学校と地域の防災教育モデル事業」が飯岡小学校であった。たまたま、銚子市内の小学校を中心として防災教室の出張授業を行っている銚子「稲むらの火」防災教育プロジェクトにオファーがあり、出張授業の軸である防災紙芝居「津波だ！いなむらの火を消すな」を上演する機会をいただいた。筆者も同プロジェクトの協力者の一人として同行していた。会場にいっしょにいた方々が被災し、家族に落命した方までいることに胸が痛かった。「今回のお話があったことに運命を感じる。ぜひ協力させて欲しい」と、筆者が挨拶した覚えがある。

渡邊は言葉をつないだ。あの日も、新たな観光資源の発掘を目的に、地質ボーリング調査をしていた。激しい揺れが始まり、長い時間、繰り返す。作業を中止せざるを得ない。刑部岬は海拔60mの高台であるため、津波避難者が三々五々増えてきた。おだやかな海が津波に変わり、たくさんの悲しみを運んできた。何もかも奪い去った。あまりの出来事で言葉が出てこない。「高臺では、しばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波にめぐり取られてあとかたもなくなつた村を、ただあきれて見おろしてゐた」(国定教科書「稲むらの火」)。

昔と違って今の避難者は津波の写真を撮っていた。観光写真ボランティア会を通じて集まってきた写真を時系列に並べ展望館に展示した。写真があまりにも多弁なのに驚かされると同時に、写真だけで済ませてよいかとの思いもよぎった。

確かに日本語の「写真」という言葉は中国語の「真を写したもの」が語源だが、英語“photograph”は、“photo”「光の」+“graph”「描くもの」であり、直訳すれば「光画」である。風がない。



どうやったら、風、被災地の空気を感じてもらえるだろうか。

4. 復興井ぶり

悲しくても、苦しくても、人は食べずには生きられない。生きるためには食事は欠かせない。避難所の災害食を思うと心が痛むが、美味しい物を食べればきっと元気が出るはず、生きる勇気が湧くだろう。こう思って、渡邊は「復興井ぶり」を始めた。賛同者を得て銚子・旭・神栖を元気にする実行委員会へと輪と和が広がった。地元の魚や野菜をのせ新鮮でうまく安全な「復興井ぶり」をたくさんの人々に食べてもらい、その売上げの10%を復興支援に寄付していただく仕組みである。

ところで、食品にトレーサビリティがある。食品がいつ、どこで作られ、どのような経路で食卓に届くかという履歴を明らかにする制度だ。食卓に届いた食品の生産情報が正直に消費者へ伝えられると同時に、消費者の声（美味しければ美味しい、こんな工夫が欲しい）が生産者へ戻る、いわゆるWin-Win（互惠）へ発展しつつあると聞いている。

寄付も似ている。寄付は多くの場合、仲介者（行政・慈善団体等）を経由して受益者へ届く。ほとんどのケースは匿名である。寄付者の思いに適切かどうか、まったく情報が無い。一般的に、人に会えば表情や仕草からもたくさんの情報が得られる。文字で読むのと、相手の声で聞くのとでは、全く印象が異なることがしばしばある。災害時の義援金も寄付である。被災者の心の負担を思うと、face to faceでないよさを理解している。しかし

被災地内で、被災者が被災者を支援するときは hand to hand 「お互いさま」であっていいだろう。少なくとも「復興井ぶり」の寄付金はそうありたい。

5. 特定非営利活動

ミーティングを重ねて、親子防災教室は実施できた。簡単でない難問解決にいくつも直面した。それらの一つずつ乗り越えて現在のNPO光と風がある。代表的な活動内容をピックアップして紹介する。

(1) 復興かわら版

津波の爪痕も臭いも時間経過とともに次第に消えていく。記憶を記録していく必要がある。2011年5月から被災者の聞き取り調査を継続している。「復興井ぶり」の寄付金を原資として、被災者に勇気を与え復興を応援するフリーペーパーを同年10月から発行している。当初は毎月、現在は隔月である。現在、旭市内を対象に、飯岡地区は全戸無料配布、他地区は町内会を通じて回覧している。防災教室でも最新号を配布している。本NPOに

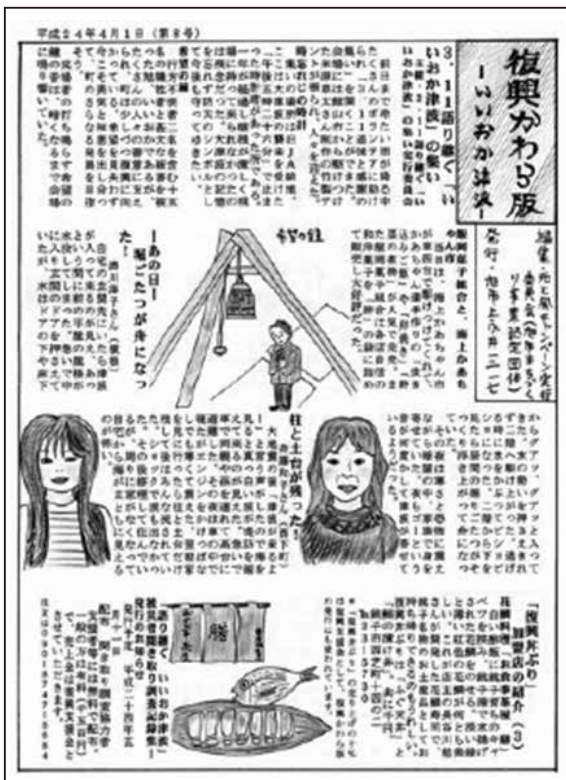
とって最も重要な情報発信である。復興かわら版は丸5年になる。継続できた原因の一つは、写真を載せず、カラーの手描きの挿し絵だと思っている。現在は3代目、旭市在住の造形作家・南隆一さんには各種の看板制作もお願いしている。

(2) 言葉の力

「復興かわら版」の取材メモをもとに「被災者聞き取り調査記録集」をまとめ、2012年春に発刊した。また、「3・11飯岡津波を語り継ぐ集い」を2015年まで4年間にわたり旧JA飯岡の跡地で開催した。津波「語り部」の活動が促進され、その物語から紙芝居「まーくん がんばれ」が誕生した。劇団ふくによって防災教室でたびたび上演されている。

2016年は、東日本大震災5周年祈念チャリティー「郷土の詩人・高橋順子講演会～読み・書き・歌い・語り継ぐ～」を千葉県東総文化会館で開催した。このとき、旭いいおか文芸賞「海へ」創設宣言が採択された。

「東日本大震災で、千葉県旭市飯岡地区は…大きな被害があった。旧飯岡町出身の高橋順子氏は、…詩集「海へ」…「三行詩のゆめ」の五番で「花





は／真っ赤になって／言葉を吐き出そうとしている」と歌っている。物言わぬ草木でも言葉にしようと、綺麗な花を咲かせている——本当に同感。言葉を心の奥にしまっておいては誰からも見えない。人は文字を知っている。文字に書けばいつでも読み返すことができる。ぜひ直筆でお書きください。また、黙読は一人です。音読はいっしょに楽しめる。…この文芸賞から人々に生きる勇気と希望を与える言葉が生まれ、地域の絆が深まることを心から祈り…宣言する」。

(3) 復興観光まちづくり

トヨタ財団2011年度地域社会プログラム・東日本大震災対応・特定課題として、「いいおか津波—語り継ぐ、まちをつくる、学びでつながる—防災教育まちづくり&観光は復興に寄与する」の助成を受けた。その成果の一つが、旭市いいおか復興観光まちづくりコンペである。来年、千葉市ポートタワーで展示を計画途中である。

現場を見ずに、文字面や数値データをながめて判断する危険性を、「浅薄な教科書学問の横行」と、寺田寅彦は「天災と国防」の中で断じている。また、詩人・高橋順子は「三百年前を忘れたゆえの悲しみだった。データを保存しておくだけの備えには限界がある」と表現している。ちなみに、観

光は易经「観国之光、利用賓于王」が語源という。ふだん生活しているところから離れ、他国や他地域の優れた部分を見聞しておけば、リーダーから重用されるとも解釈できるだろう。

(4) 円卓会議



いいおか津波復興プロジェクトに取り組み、千葉県による補助金、2012年度「連携・協働による地域課題解決モデル事業」、2013・14年度「地域コミュニティ活性化支援事業」を連続して受給した。これらを通じ円卓会議の役割を学んだ。補助金が終了した後にもその事務局を務めている。復興においてよりよい地域社会の未来を築くための課題解決を目的とする「復興観光まちづくり」円卓会議と名付けている。ここから、花と緑で旭を元気にするプロジェクトが誕生し、2014年度ちばコラボ大賞（復興観光～被災から花と緑いっぱいのもちづくり～）に貢献できたと自己評価している。

(5) 新しい公共の末席

百年に1度の場所を百年毎日使う場所へ！飯岡漁港から刑部岬まで標高差60mを最短で登れる。震災の前、忘れられた観光遊歩道には木々の枝が重なり合う。うす暗く落ち葉と不法投棄ゴミが散乱し観光客も住民すら立ち寄りぬ。花PJの清掃と防災教室の活用が円卓会議に報告され、市主催・津波防災訓練の避難道となった。

忘れじの時計（元JA飯岡支所の時計）は、2011年初冬、廃棄寸前だった。それを救い出し、かくまったのは民間の手である。自立させたのは



葛飾区郷土と天文博物館であり、修復した経費は千葉県補助金を使い、旭市防災資料館で自由に見学できるように展示してある。これら2例は、市民ボランティア・NPO・行政が協働して公共を実現した事例といってよいのではないかな。

避難生活を追体験する上で、仮設住宅の現物を見学する防災教育プログラムは欠かせない。その現物保存を県や市へ要望したが、いまだ叶わない。幸いNPOは法人であり、所有権が認められている。仮設住宅メーカーの賛同を得て譲渡を受けた。仮置き場所の地権者との契約に従い公開展示を行っている。



親子防災教室は、旭市海上キャンプ場と共催で、2014年度から、親子防災キャンプとして宿泊型へ発展させ、2015年度から子どもゆめ基金の補助金を受けて運営している。活動は教免講習・地域発：防災教育のかたち（千葉科学大学）特別講師として現職教員へ紹介し、内閣府へ「津波防災に関する取組」としても報告・記録されている。

6. むすび

地方自治は、江戸以前からあった自然集落を明治半ばに小学校を中心として数百戸を基準として「明治大合併」して始まったとされている。「昭和大合併」では、戦後教育の政策63制の柱である新制中学校を中心として人口8千人を基準として統合があった。そして「平成大合併」は、社会インフラの整備を前提に少子高齢化と職住分離など社会問題を解決するため実施されたという。その結果、明治の約7万に比べて平成には2千弱、約40分の1に激減した。

大きな組織では「公平、法令遵守、説明責任」が最優先することによって民主主義が成り立つ。その前提条件は、社会インフラ、特に移動手段や情報伝達の発達にあった。しかしメガ災害はこれらも直撃した。復興では、広域・多様・長期に渡る複雑系である。これに対して、地勢・文化風習などが異質な地域の寄合（平均40か所以上）では、対応の遅れ・ミスマッチなど問題が起こるべきして起こっているのかもしれない。

防災とボランティアの日（1月17日）は、阪神・淡路大震災で対応の遅れがあった行政に比べて、ボランティアの活躍が高く評価されたからだという。輪と和が広がりNPOにまとめれば、より成果が上がるだろう。円卓会議を開催し、多様なステークホルダーが協働できれば最善であろうと考え努力してきた。たくさんの応援を受け、活動を継続している。残念なのは、まだNPOへの理解不足が残っていることだ。また、財政面の運営も厳しく、助成金や補助金の申請やその会計にも苦労している。

本論の依頼に勇気がわき、執筆は活動を振り返る好機となったことに感謝している。結びとして、詩の一節を引用しておく。

「どこかに通じてゐる大道を僕は歩いてゐるのぢやない／僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」（道程 高村光太郎）。